

シノドス（世界代表司教会議）にむけて

④

今月も、東京教区シノドス担当の小西神父さまに寄稿いただきました。

\* \* \*

シノドス性について その三

瀬田教会主任司祭・小西広志神父

シノドス性の基礎となるのが信者の総体が備えている「信仰の感覚 (sense of faith)」です。少しややこしいお話になりますが、教皇さまの発言などを取りあげながら、この表現の意味を概観してみましょう。

第二バチカン公会議の『教会憲章』は次のように語っています（第十二項）。

聖なるかたから油を注がれた信者の総体は、信仰において誤ることができない。この特性は「司教をはじめとしてすべての信徒を含む」信者の総体が信仰と道徳の「とがらに全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通して現れる。

いうことです。

聖パウロの世教皇が自発教令「アポストリカ・ソリチュード」で1999年に「普遍教会のための司教たちのシノドス」を制定してからも、教皇たちは「信仰の感覚」に基づくシノドスの教会の重要性をあきらめたわけではなかったと思います。しかし、次第に「信仰の感覚」という考えは忘れ去られていったかのようです。例えば1983年の教会法典にはこの表現が見当たりません。

教皇フランシスコが2013年に発表したシノドス後の使徒的勧告『福音の喜び』には「信仰の感覚」についての言及が見られます。すべての信者が福音宣教へと招かれているという文脈の中で次のように語っています。

洗礼を受けたすべての人には例外なく、福音宣教へ駆り立てる聖霊の聖化する力が働いています。神の民が聖なる者なのは、「信仰において (in credendo)」、誤ることのない油を注がれているからです。つまり、たとえ信仰を表すことばが見つからな

くとも、信じていれば誤っているわけではないという」のです。聖霊は信者を真理へと導き、救いへと案内してくださいます。人類に対する神の愛の神秘として、神は、神から来るものの識別を助ける「信仰の感覚 (sensus fidei)」を与えてくださいます。

教皇フランシスコは「信仰の感覚」に新しい意味を付与したと言えるかもしれませんが。「誤ることができない」という否定形ではなく、積極的に見分けていく能力としての「信仰の感覚」です。

すでに「信仰の感覚」については2014年に国際神学委員会が共同研究の成果として『教会の生活における信仰の感覚』を発表しています。それを受ける形で2015年には「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説」において教皇フランシスコは「信仰の感覚」について次のように述べています。

信徒にも、主が教会に示される新たな道を嗅ぎわかる「嗅覚」があるのですから、

「信仰の感覚」の視点からは、教える教会 (Ecclesia docens) と教わる教会 (Ecclesia discens) を厳密に分けることはできません。

そして聖ヨハネ・クリゾストモの言葉を用いながら、教皇は「教会とシノドスは同義語である」ことの理解を深めるべきであると主張しています。さらに、教皇は続けます。

教会は、神の民が主キリストに向かう歴史の旅路を「共に歩む」ことに他ならないのですから、その中では、誰も他の人の「上」に「立つ」ことなどできないということも理解できます。むしろ教会の中では、旅路において兄弟姉妹に仕えるため、人は自らを「低く」する必要があるのです。

神の民に与えられた「信仰の感覚」のおかげで、教会はこの地上にあつて歩み続けることができるのです。このように「信仰の感覚」は「シノドス性」の核心をなす原理となります。

洗礼と聖霊の塗油のおかげで、主イエス・キリストと深く結ばれた信者は、教会の一員として真理を見分ける「信仰の感覚」をたまものとして父なる神から聖霊を通していただいています。この「信仰の感覚」こそが、御父の方へと共に歩んでいく神の民にとっての共通の基盤となる。そして、「信仰の感覚」から、信者の共通祭司職、預言職が生まれていくのです。

\* \* \*

いったん小西神父さまからの寄稿は終了となります。今後、勉強会や分かち合いを企画しています。

信仰養成委員会